

今、振り返ると私の部落差別との出会いは、小学校高学年の頃だったように思う。学習会でのクリスマス会の話友達から聞いたときだ。そのときは、『なぜある特定地区だけそんなことするのだろう。』と大変不思議に思い、そのときの担任の先生に、「僕らもクリスマス会をさせてください。」と訴えたように記憶している。その当時には、恥ずかしながら学習会という言葉さえも知らなかったし、そのことを深く大人に聞くこともしなかった。そんな私は中学校、高校と進んでいく中で、あまり部落問題学習を受けた記憶がない。当時から道徳の授業はされていたが、自分の心の中に深く刻み込まれたものではなかった。当然、中学校にも学習会はあった。部落差別解消を願い、それを実現するために必死に学習会に通っていた友達がいたのに、私は何にも知らず、また意識して知ろうともせず、ただ自分さえよければよいという気持ちで生活を送っていた。部落差別に関しては、『部落差別はしてはいけないことだ。部落とは関わってはいけない。差別的な発言はしてはいけない。自分は絶対差別などしない良い人間だ。』と思い続けていた。というより、そういうことを自分に言い聞かしていたように思う。すでにその時にはまぎれもない差別者であったのだ。自分の醜い部分には頑丈なペールをかけ、人前では美しい自分でありたい。そういった表面的な人間であった。その心の奥底にはやはり、部落に対して誤った考えがあり、それには触れてはいけない部分だという思いがあったのだ。だから、部落出身の友達に対しては、何気ない会話や行動だけの表面的な付き合いしかできなかった。互いに苦しい胸の内や思いを吐き出し合い、支え合い、励まし合い生きていく、本当の意味での友達にはなりきれていなかったのである。自分のそういう態度が部落で生まれたということを、友達に重たく感じさせるような、自分自身に誇りを持たさず、胸張って生活させないような状況をつくっていたのではないかと思うと、胸が切り裂かれる思いである。自分のそういった意識が何人の幸せを奪ってきたのだろうか、情けなく思い、またそんな自分が齒がゆくて仕方がない。何でそんな自分になったのだろうか。何がそうさせたのだろうか。そこには私の生きてきた生活環境があり、部落差別を容認している社会があることに気付かされた。思い込みと偏見を次の世代に受け継がせる社会があるのである。何が真実で、何が正義か、何が間違っているのかを隠してしまう社会がそこにあるのである。しかし、自分もそういった間違いだらけのおかしな社会をつくっている一員なのである。まずそのことを自覚すべきであり、そのことから目を背けるわけにはいかない。その社会をこれからどれだけ変えていけるか。それが教師である私の使命だと思う。いや、教師という前に、人間としての使命だと思う。あらゆる生活場面において、間違っていることは間違っていると見える、正義を貫き通す強い自分であり続けたいと思う。それが自分を豊かにしてくれ、また一人ひとりが輝き、尊敬し合い、夢や希望を持ち、共に生きる、本当の人間社会をつくっていく第一歩であると思う。

そういったことを思い知らされたのが、この板野中学校でなされている、教師と生徒が共に歩んでいる部落問題学習の取り組みからである。部落問題学習の大切さは十分理解していたつもりであったが、それが自分のことと捉えられないでいた。他人の問題であり、自分の問題であるとあまり感じていなかった。

部落問題学習は自分と部落差別がどう関わっているかを考えていかなければならない学習だと思う。部落差別が残されていることを考えるとき、残してきたのは我々一人ひとりである。『この意識は間違っている。』と、分かっているでもそれを修正することをせず、ただ自分とは関わり

のないことだからと、見て見ぬ振りをする。それが差別を黙認することであり、また差別をつくっていくことであると思う。『あーこれはいかんな。今、差別があったな。』と感じながらもその場を通り過ごす。そのことが罪悪感として自分の心の中に重たくのしかかっても、偽りの顔を表面に見せ生活をする。本来人間であれば非常に苦しいことのはずだ。それが部落出身者に対して自分に誇りを持たせず、生まれたところ、ふるさとに誇りを持たせないような状況をつくっていることにつながっていくのではないだろうか。そう思うときに差別は私自身が残してきたことに気が付き、部落問題が自分の問題であることに気付かされた。部落差別が存在する社会では部落出身者だけが悩み苦しむのではなく、部落、部落外関係なく悲しく、切ない思いになる。つまり、人間みんなが不幸になっているのではないだろうか。自分をその他大勢の社会の流れに身を任せ、間違った連帯感を感じながら、自分自身を抑え、殺して、周りの目ばかりを気にしながら生活していく。それが生きることだろうか。誰でも自分の思いや願いというものを持っており、また、物事に対して良いこと、悪いことといった善悪も分かる。それが自分の心の中で作った世間や社会におびえ、それらを曲げられることは決して許されるものではないと思う。人間は一人ひとりが尊重され、一人ひとりが認め合わなければならない。一人ひとりが光り輝く存在になることが、部落問題学習をしていく中で一番の願いではないかと考え始めた。思い込みや偏見といったものに自分が支配されるのではなく、躍らされるのではなく、真実をしっかりと語れる自分を持つ必要があると思う。

私にはかけがえのない弟がいる。弟は小さい時の予防接種で引きつけを起こし、それ以来、耳がほとんど聞こえない。だから補聴器を付けて生活している。スポーツが好きで、中学校、高校とずうっと陸上をしていた。運動能力はそれほど高くはないのだがこつこつ努力するタイプで、毎日毎日家の周りを走っていた。定時制高校へ進学し、全国大会にまで出場するようになった。私の育った美馬郡は町対抗の駅伝大会があるのだが、その美馬町代表選手として出場した。駅伝大会当日には弟の走る区間に応援に行った。他の町村の選手が何人か走り抜けて行くのだが、弟の姿がなかなか見えなくて、やきもきした気持ちで、寒い中、父と二人で弟を待っていた。しばらくして弟は苦しそうな表情をして、寒風の中走ってきた。弟は私と父の姿を見つけると、今まで苦しそうな表情だった顔をキリッとさせ、力強く走り抜けた。その時私は、学校で部活動を指導しているときのように激を飛ばそうと声を上げたかったのだが、涙がポロポロ出て声にならなかった。何でか分からないけれど、涙が止まらなかった。何人もの選手に抜かれ、前の選手の姿が見えないくらい成績は悪かったが、一生懸命、力一杯走っている弟の姿を見て、あの時ほど感動したことはなかった。そんな弟との関わりのなかで、弟を隠そう隠そうとしていた過去の自分があった。「兄ちゃん、兄ちゃん」と慕ってくる弟を突き放していた自分があったのだ。自分の中に抱いていた世間、『補聴器を付けている弟がいることをみんなが知ったらどんなに思うだろうか。変な目で見られるのではないだろうか。』といったことを気にしながら、おびえながら生活していたように思う。自分が障害者と言われる人に対して持っていた意識を、同じようにみんなも持っているのではないだろうかと考え、『弟と一緒にいるところを他の人に見られたくない。黙っていよう。』と思っていた。どんな人にも優しく、温かく接することのできる弟を認めようとせず、反対に負い目とさえ感じさせる意識があった自分が無性に情けない。素晴らしい人間だと心の中では思っている、それをそのまま表現することができなかった自分を腹立たしく思う。そういう私から出発した部落問題学習の中で、自分の弟が自慢になり、弟のことをみんなに知って欲しいといった思いに駆られ始めた、また、弟を誇りに思えるようになってきた。板野中学校での部落問題学習の取り組みの中で、そういう自分へと意識を変えさせてくれた。自分の中にあるしがらみから自分を解き放すことにより、今までの自分というものが再認識でき、一

人ひとりが胸を張って輝きながら生活することの素晴らしさや、何が自分にとって本当の幸せなのか気付かせてくれた。また、仲間と共感し合い、互いに認め合い、支え合うことの大切さを学ぶことができた。

私自身にとってのそういった部落問題学習の素晴らしさに気付かされたのが、全体学習での取り組みからであった。部落問題学習とは、自分を見つめ直すことができ、その自分とその周りにいる人間との関わり、仲間との関わりの中での自分のあり方、人間社会の一人としての生き方とはどういったものであるか、何が自分にとって素晴らしく、生き生きとした生き方なのかを考えることのできる学習ではないかと考える。それは、自分の中にある本当の思いを語り合うことにより、もがいている本当の自分の姿を吐き出すことにより気付くものであり、また、自分の周りにいる人間のそういう姿を見て、共感し合う中で、それに気付かされるものであると思う。しかし、自分の胸の中にある重たくのしかかっているものから自分を解放するというのはすごく苦しく、勇気のいることである。まして、学年全体、学校全体の中で、自らをさらけ出すことがどれほど苦しいことか……。自分の奥底にあるものに触れることは、これからの自分が周りの人にどう見られていくのだろうかといった不安感で一杯になる。まさしく自分の中にある世間との闘いではないかと思う。勇気を出して自分を語ってくれる仲間になりたい。何か言葉を返していきたい。そういった共感する思いが仲間の信頼感をつくっていくだろうし、その中で生まれた連帯感が勇気を振り絞り、苦しい峠を乗り越えていく生徒の生活を支えていくのではないだろうか。また、苦しくうつむく生徒の顔を堂々と上げさせいくのではないだろうか。峠を乗り越えようとしている仲間から勇気をもらい、自分の浅はかさ、情けなさ、自分に対してのはがゆさといったものに気が付き、自分の意識を揺り起こしてくれるのではないかと思う。また、今までの偏見に操られた自分、真実を見ようとしなかった自分、自分以下を求めて満足していた自分、本当の自分を抑え殺し、周りに合わせていた主体性のない自分に気付かされていくのだと思う。私がそうであったように……。自らの解放から自分自身の変革が始まり、差別とはいったい何か、差別を解消していく主体的な取り組みとは何か、自分が差別解消の主体者としてどう生きていくかを学ばせてくれる。そういった『自分を語る』営みを支えているのが板野中学校での全体学習であると私は思う。学級を越えた学年全体、学校全体の中でこそ、強い連帯感が生まれ、それが多くの生徒の支えとなり、自らの解放の源となっていくのではないだろうか。私が全体学習で与えてもらったものがそうであった。先に述べた弟との関わりを含めた自分と部落問題との関わりがはっきりと私自身の中で見つけられ、やっとそのことが人前で語れたのが学習会での全体学習であった。生徒が切々と自分と部落問題との関わりを、また家庭での部落問題のことをもがき苦しみながら語っていく姿を目の当たりにしたとき、私の中で目覚めるものがあつた。何かほっとするような、また震えるような感情が芽生えてきた。『今なら、自分のことしゃべれるような気がする。弟のこと分かってくれそうな気がする。弟のことを誇りに思うことをみんなに語れる。弟のことを今まで隠そうとしていた許せない自分を分かってくれそうな気がする。好きな弟だが、自分にとって苦しいものとしかたもらえてなかった自分を語れるような気がする。』そんな気持ちになった。私は生徒に勇気を与えてもらった。また、押し殺した自分の中身を語る喜び、自分のしがらみから解放された喜びを感じさせてもらった。それと同時に、私は今まで何をしてきたのだろうか。何のためにここにいるのだろうか、と考えさせられた。生徒には発言を促してはいるものの自分に関してのことは何も語れず、ただ、その時間を漠然と過ごしていたように思う。生徒を崖から突き落とすようなことしかできなかつた自分に気が付いた。この学習は教師という立場で生徒だけに強要させる学習では何の意味もない。生徒と教師が共に一人の人間として部落問題と正面からぶつかり合い、語り合うことができなければ、表面的な希薄な学習になってしまう。教師が自

らを語らず生徒だけに強要することは、逆に差別を再生産することにつながるのではないかと。差別をなくしていく営みが、反対に差別をつくっていくことになってしまうのではないかと思い始めてきた。

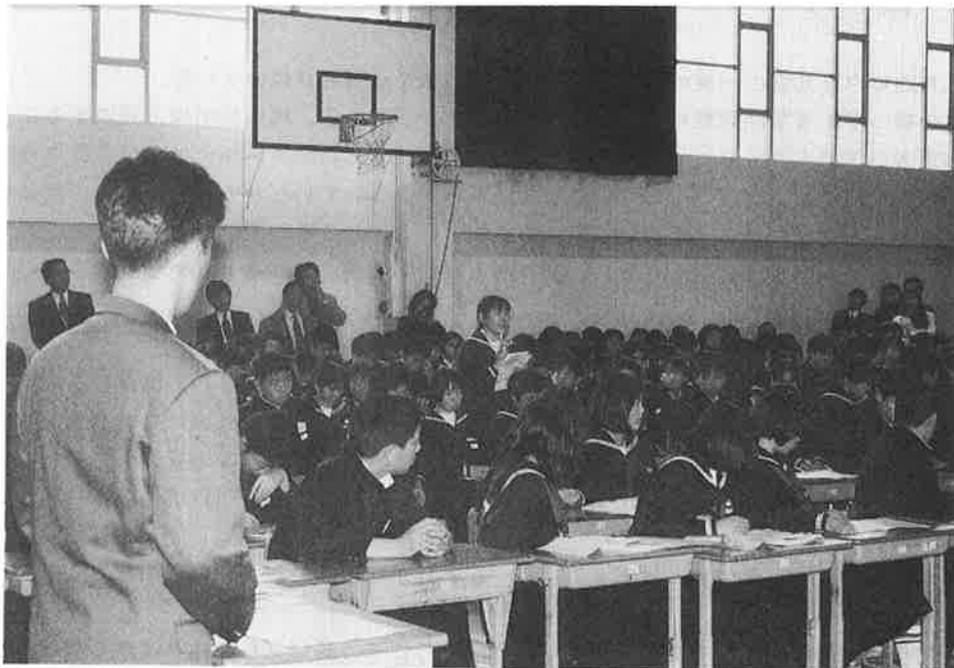
そういった思いの中、この“ふるさと”の詩は私にとって大変感銘を与えてくれるものとなった。人間みんな“ふるさと”を心の中に持っている。そこには、自分自身にとって何事にも代え難い、大切な、安らぎを与えてくれるものがあると思う。それからイメージするものは人によって多少は違うと思うが、心の奥底に脈々と流れている“ふるさと”に対する思いは皆同じではないだろうか。例えば、自分の生まれ育った場所であったり、育ててくれた家族であったり、仲間だったり、自分の通った学校だったり、自分の大切な、一番好きであろう部分が“ふるさと”ではないかと思う。それが、自分一人で苦しくて悩んでいるとき、そっと手を差し伸ばし温かく包み込んでくれ、また生きていく勇気や力を与えてくれるものではないかと思う。部落差別とは、その生まれ育った“ふるさと”によって差別されるのである。生きる上で一番のよりどころとなっているものに対して差別されるのである。このようなことが許されていいのであろうか。許されるはずがない。このことは何年も前から言われ続けていたことであるが、まだそんな当たり前のことを私自身も言っている。徐々にではあるが部落差別解消へ前進してはいるが、まだまだ十分でないように感じる。それは、“ふるさと”に対して持っている思いは自分だけのものであり、周りの人がその自分自身が持っている本当の思いや願いに対して何も感じてくれない、理解してくれるものでもないんだと捉えてしまう状況や、反対に“ふるさと”を知られることによって、思い込みや偏見で差別されるのではないかという意識を持たせてしまう状況がまだ残っているからだと思う。つまり、それを知られてはいけないこと、隠さなければならぬことと思わせる社会があるからではないだろうか。だから“ふるさと”が自分にとって触れられたくないこと、つまり、恥ずかしいことと捉えてしまうのだと思う。自分にとって一番大切な部分の“ふるさと”さえ見ようとせず、隠そうとする意識こそが部落差別を含めた、すべての差別を今日まで残している一番の原因であり、今“ふるさと”が人にとって一番苦しいもの、自分の心の中に重たくのしかかってくるものと思わせてしまっていることが問題ではないだろうか。自分にとって“ふるさと”というものをしっかり捉え、その“ふるさと”に誇りが持てるようにならなければならぬし、互いに誇りに思えるような仲間集団、社会の一員になることが差別解消への道だと思う。私にとって“ふるさと”とは何かと聞かれたとき、一番最初に思い浮かんでくるのは弟の顔であり、それを含めた自分の家族である。しかし、私自身も大切にしている家族を誇りに持てず、重荷のように感じていた自分が過去にあった。堂々と家族の生き様を語ろうとしない自分があった。その“ふるさと”から逃げることにより、“ふるさと”を語り堂々と生きている人を見て、他人事であったり、その生き様に対してねたみや偏見を持ち、更に新しい差別をつくってきたように思う。互いの“ふるさと”を知り合い、認め合うことにより自分にとって大切なものは何か。自分にとって真実を求めて生きるということは何か分かってくるのではないかと。また、仲間を互いに認め合い、共に生きる仲間集団として一層深い絆、連帯感が作られていくのではないだろうか。

今、私は三年生の学級担任である。三年生はこれから卒業して皆それぞれの進路に向けて飛び出さなければならない。その生徒に“ふるさと”を誇りに思いながら生きていって欲しい。“ふるさと”を胸張って語れる人になってもらいたい。生活していく中で“ふるさと”を自分自身の心の中の糧として強く生きて欲しい。この板野中学校の部落問題学習が、また共に学び、語り合ってきた仲間が、本当の意味での“ふるさと”の一つになるよう取り組んでいきたいと思っている。生徒も教師も一人の人間として互いに支え合い、認め合い、自分に誇りを持ち、堂々と胸張

って自分の進路を一步一步確実に歩いていける人間となることを願い、部落問題学習を更に深まりのある学習へと考えている。また私自身、部落差別解消の一人として生き続ける強い自分になるため、頑張り続けようと思っている。そういう思いで、丸岡さんの“ふるさと”に対する思いが変容していったことを通して、自分の“ふるさと”とは何か、またその“ふるさと”に思いを寄せて、自分と“ふるさと”との関わりを語り合い、部落差別解消に向けて主体的に生きることの素晴らしさをこの全体学習でより確かなものとしたい。

展 開

学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
<p>1 自分にとっての“ふるさと”とは何か。</p>	<p>・自分にとって大切に思っていること、心の奥底にしまい込んでいる思いが自分にとっての“ふるさと”であることに気付かせる。</p>
<p>2 “ふるさと”を誇りに思い生きることとはどういう生き方なのだろうか。その為に自分は今、何をしてくべきかを語り合う。</p>	<p>・自分の“ふるさと”を語り合う中で、共感し合うことにより、互いを認め合い、支え合い、共に生きていこうとする意識を芽生えさせる。</p>



学校全体授業（河野教諭）